

巴

觀世小次郎作

前

ワキ
旅僧

シテ
里女

後

ワキ
前に同じ

シテ
巴

地は
近江

季は
正月

「行けば深山もあさもよい。く。木曾路の旅に出
でうよ。」

「是は木曾の山家より出でたる僧にて候。我いまだ
都を見ず候ふ程に。此度思ひ立ち都に上り候。」

「旅衣。木曾の御坂を遙々と。く。思ひ立つ日も
美濃尾張。定めぬ宿の暮ごとに。夜を重ねつゝ日
を添へて。行けば程なく近江路や。鳩の海とは是
かとよ。く。」

「急ぎ候ふ程に。江州栗津の原とやらんに着きて候。
此所に暫く休らはゞやと思ひ候。」

「おもしろや鳩の浦波しづかなる。栗津の原の松陰
に。神を祝ふや政事。実に神感も頼もしや。」

「不思議やな是なる女性の神に参り。涙を流し給ふ
事。返すぐも不審にこそ候へ。」

「御僧は自らが事を仰せ候ふか。」

「さん候神に参り涙を流し給ふ事を不審申して候。」

シテ「おろかと不審し給ふや。伝へ聞く行教和尚は。宇
佐八幡に詣で給ひ一首の歌に曰く。何事のおはし
ますとは知らねども。

詞「忝なさに涙こぼるゝと。かやうに詠じ給ひしかば。
神もあはれと思しめされけん。御衣の袂に御影
をうつし。それより都男山に誓ひを示し給ひ。国
土安全を守り給ふ。おろかと不審し給ふぞや。

ワキ「やさしやな女性なれども此里の。都に近き住居と
て。名にし負ひたるやさしさよ。

シテ詞「さてく御僧の住み給ふ。在所は何処の国やらん。

ワキ「是は信濃の国木曾の山家の者にて候。

シテ「木曾の山家の人ならば。栗津が原の神の御名を。
問はずは如何で知り給ふべき。是こそ御身の住み
給ふ。木曾義仲の御在所。同じく神と祝はれ給ふ。
拝み給へや旅人よ。

ワキ「不思議やさては義仲の。神とあらはれ此所に。い

まし給ふは有難さよと。神前に向ひ手を合はせ。

地

「古への。是こそ君よ名は今も。く。有明月の義
仲の。仏と現じ神となり。世を守り給へる。誓ひ
ぞ有難かりける。旅人も一樹の陰。他生の縁とお
ぼしめし。此松が根に旅居し。夜もすがら経を讀
誦して。五衰をなぐさめ給ふべし。有難き値遇か
な。実に有難き値偶かな。さる程に。暮れて行
く日も山の端に。入相の鐘の音の。浦わの波に響

きつゝ。いづれも物すごきをりふしに。我も亡者
の来りたり。其名をいづれとも。知らずは此里人
に。問はせ給へと夕暮の。草のはつかに入りにつ
り。く。(中入)

ワキ歌

「露をかたしく草枕。く。日も暮れ夜にもなりし
かば。栗津が原のあはれ世の。亡き影いざや弔は
ん。く。

後ジテ

「落花空しきを知る。流水心なうしておのづから。

澄める心はたらちねの。

地

「罪も報いも因果の苦しみ。今は浮まん御法の功力に。草木国土も成仏なれば。況んや生ある直道の弔ひ。彼是いづれも頼もしや。頼もしやあら有難や。」

ワキ

「不思議やな栗津が原の草枕を。見れば有りつる女性なるが。甲冑を帯する不思議さよ。」

シテ詞

「なか／＼に巴と言ひし女武者。女とて御最期に。」

召し具せざりし其恨み。

ワキ

「執心のこつて今までも。」

シテ

「君辺に仕へ申せども。」

ワキ

「恨みはなほも。」

シテ

「荒磯海の。」

地

「栗津の汀にて。波の討死するまでも。御供申すべかりしを。女とて御最期に。捨てられ参らせし恨めしや。身は恩のため。命は義による理。誰か白

真弓取の身の。最期に臨んで。功名を惜しまぬ者
やある。

クセ「さても義仲の。信濃を出でさせ給ひしは。五万余
騎の御勢。鑣をならべ攻め上る。礪波山や俱利伽
羅。志保の合戦に於ても。分捕高名の其数。誰に
面を越され。誰におとる振舞の。なき世がたりに。
名ををし思ふ心かな。

シテ「されども時刻の到来。

地「運槻弓の引く方も。渚に寄する粟津野の。草の露
霜と消え給ふ。所はこゝぞ御僧達。同所の人なれ
ば。順縁に弔はせ給へや。

ロンギ地「さて此原の合戦にて。討たれ給ひし義仲の。最期
を語りおはしませ。

シテ「頃は正月の空なれば。

地「雪はむら消えに残るを。たゞ通路と汀をさして。
駒をしるべに落ち給ふが。薄氷の深田に駆け込み。

弓手も馬手も鎧は沈んで。下り立たん便りもなく
て。手綱にすがつて鞭を打てども。引く方も渚の
浜なり。前後を忘れて扣へ給へり。こは如何にあ
さましや。かゝりし処に。自ら駆けよせて見奉れ
ば。重手は負ひ給ひぬ。乗替に召させ参らせ。此
松原に御供し。はや御自害候へ。巴も共と申せば。
其時義仲の仰せには。汝は女なり。忍ぶ便りも有
るべし。是なる守小袖を。木曾に届けよ此旨を。

背かば主従。三世の契り絶えはて。永く不興との
たまへば。巴はともかくも。涙にむせぶばかりな
り。

地「かくて御前を立ち上り。見れば敵の大勢。あれは
巴か女武者。余すな漏らすなと。敵手繁くかゝれ
ば。今は引くとも遁るまじ。いで一軍うれしやと。
巴少しも騒がず。わざと敵を近くなさんと。長
刀引きそばめ。少し恐るゝけしきなれば。敵は得

たりと切つて懸かれば。長刀柄ながくおつ取りの
べて。四方を払ふ八方払ひ。一所に当るを木の葉
返し。嵐も落つるや花の滝波。枕をたゝんで戦ひ
ければ。皆一方に切り立てられて。跡も遥に見え
ざりけり。く。

シテ「今は是までなりと。」

地「立ち帰り我君を。見奉れば痛はしや。はや御自害
候ひて。此松が根に伏し給ひ。御枕のほどに御小

袖。肌の守を置き給ふを。巴なくく賜はりて。
死骸に御暇申しつつ。行けども悲しや行きやらぬ。
君の名残を如何にせん。とは思へどもくれぐの。
御遺言の悲しさに。栗津の汀に立ち寄り。上帯切
り。物の具心静に脱ぎ置き。梨打烏帽子同じく。
かしこに脱ぎ捨て。御小袖を引きかづき。其際ま
での佩添の。小太刀を衣に引きかくし。処はこゝ
ぞ近江なる。信楽笠を木曾の里に。涙と巴はたゝ

ひとり。落ち行きしうしろめたさの。執心を弔ひ
て給ひ給へ。く。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第二輯』大和田建樹 著